

あったと捉えているようにも思われた。だが、本書は「概説書」たることを目指したためであろうか、そうした方法論をめぐる合意が、必ずしも執筆者のあいだで共有されてはならず、それゆえ本書がよりテーマや執筆者を絞り、以上に示したような視点を徹底させて編まれたのであれば本来持ち得たであろう「鋭さ」のようなものが失われてしまったように思われるのである。また、「地域研究の手法と理論的な分析手法の結合」を目指すものであるならば、そうした方法論に関する理論的な考察をおこなうパートを冒頭に設けるなどの工夫があってもよかったのではなかろうか。

一方で、以下は評者が本書に触発されるかたちで抱いた私見に過ぎないが、本書が目指すような地域研究の手法と理論的分析手法(あるいは社会科学的手法)の結合とは、あらゆるテーマ・対象に関して必要なかどうかを改めて考える必要があるのではないだろうか。確かに、社会科学的手法が、中東・イスラーム地域における社会現象をよりよく理解するうえで有用である限りにおいては、それを援用することはやぶさかではないし、むしろ必要であろう。既存の理論を十分に踏まえないままに、殊更に中東・イスラーム地域を特殊視する見方は厳しく戒められねばなるまい。ただし、既存の理論を踏まえたうえで、どうしてもその理論によっては説明されにくい現象を説明するためには、既存の理論から一旦敢えて離れるということも必要なのではないだろうか。こうしたことを考えたのは、とくに本書の第Ⅱ部を読んだからかもしれない。例えば、松尾昌樹氏によって書かれた「第2章 中東地域研究とレンティア国家論」などは、理論によって地域が説明され、また地域によって理論が鍛えられていくことをよく示しており、「地域研究の手法と理論的分析手法の結合」の有効性や意義を明瞭に述べた章であると考えられる。その一方で、同章に続く長岡慎介氏によって書かれた「第3章 イスラーム経済論」などは、既存の経済学的アプローチに基づくだけでは決して見えてこない、イスラーム金融の固有性や、さらにはそこから近代資本主義型金融の特殊性を浮き彫りにする、地域研究のダイナミズムを感じさせる章である。多様な方法論が存在することを認めることが、中東・イスラーム地域に関する研究や、さらには社会科学の一層の発展をもたらすことにつながるのではなかろうかと評者には思われた。

もっともこうした点を、本書に全て求めるのは、ないものねだりの批判であるに違いない。これらは、むしろ今後の研究に委ねられる課題であり、また本書で取り上げられた地域研究の手法と理論的分析手法の結合をめぐるのは、これからも引き続き喧々諤々の議論がおこなわれていくものと考えられる。現在の変化が激しい中東・イスラーム地域をめぐる研究の最前線を示し、現在の到達点を示した本書が刊行されたことを素直に喜びたい。

(千葉 悠志 早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手)

**塩野崎信也『〈アゼルバイジャン人〉の創出——民族意識の形成とその基層』(プリミエ・コレクション 77)
京都大学学術出版会 2017年 xiv+420頁**

＜本書の概要＞

「民族」とは何か、我々は「民族」にどう向き合うべきか。古今東西、多くの学者や政治家がこの難題を解決すべく様々な試みを繰り返してきた。特に、ソヴィエト連邦崩壊に伴い社会主義体制が終焉を迎えた東欧諸国や中央アジアといった旧共産圏を研究対象とする歴史学者たちは、民族国家として独立した後の各国のナショナル・ヒストリーを見直し、再構築するという重大な課題を背負ってきた。「民族」をめぐる難問に真摯に取り組んできた彼らによる一連の研究成果には、目を見張るものがある。旧共産圏であったアゼルバイジャンの歴史を論じる本書からも、著者のこのような強い問題意識が伝わってくる。

アゼルバイジャンとは、現在のアゼルバイジャン共和国とイラン領アゼルバイジャン州、及びアルダビール州を合わせた範囲にほぼ相当する、カスピ海西南岸を中心とした一帯の呼称で、本書では南東コーカサスとも呼ばれる。古代から現代に至るこの地域の略史についてまとめた本書の第1章「南東コーカサス略史」によれば、この地域は、サーサーン朝による支配、アラブによる征服とイスラーム化、セルジューク朝の西進と住民のテュルク化、イルハーン朝への編入、さらにはサファヴィー朝支配下でのシーア派信仰の受容を

経て、今日のようにシーア派のテュルク系住民が多数を占めるようになっていった。18世紀前半のサファヴィー朝崩壊後、オスマン帝国、ロシア帝国、イラン高原の諸ハーン国、ガージャール朝などの支配を受け、19世紀前半に正式にロシア領となった南東コーカサスでは、石油産業で栄えたバクーを中心に近代化が進んだ。そして、1920-91年のソヴィエト時代を経て、独立国家アゼルバイジャン共和国が成立する。

本書が主に扱うのは、ロシア帝国統治下の19世紀から20世紀初頭の時期である。この時期に南東コーカサスにおいて「アゼルバイジャン」という地域概念が形成され、「アゼルバイジャン人」という民族意識が醸成されていった過程を明らかにすることによって、「民族」や「国家」をめぐる大きな問題に一つの事例を提供するのが本書の目的である。

本書は、序章、本論第1-7章、終章、及び結論から構成される。

まず、第2章「＜アゼルバイジャン＞とは、どこか」、補論1「ペルシア語史書に見る＜アゼルバイジャン＞の用法」、及び補論2「各言語の史料に見る＜アゼルバイジャン＞」では、イスラーム世界内外で書かれた地理書や辞典の記述に基づいて、地名＜アゼルバイジャン＞の用法やこの語が示す領域の歴史の変遷が論じられる。＜アゼルバイジャン＞という地名は、アケメネス朝のサトラップ(総督)であったアトゥルパトを語源とし、元来アラズ川の南側のアーザルバーイジャン地方だけを意味していた。イスラーム地理学の方野では少なくとも15世紀頃までこの地理認識が伝統的に受け継がれてきたが、16世紀後半に＜アゼルバイジャン＞の北限がアラズ川からキュル川へと移動し、それまで＜アッラーン＞＜ガラバグ＞と呼ばれていた領域が＜アゼルバイジャン＞の一部とみなされるようになったという。このような地理認識は17世紀前半には定着し、オスマン語やヨーロッパ諸言語の作品にも見られるようになった。さらに、18世紀には、キュル川の北方に位置するシルヴァーン地方をも含む＜アゼルバイジャン＞の用法が登場する。現在の「南北アゼルバイジャン」に近いこの地理感覚は、18世紀後半以降徐々に普及していき、少なくとも19世紀後半のペルシア語の地理書や歴史書においては一般的なものとなっていた。一方で、このような地理認識は、南東コーカサス現地の知識人や詩人たちには見られなかった、と著者は指摘する。「地域」より上位の連帯意識が希薄であった彼らには、自分たちの住む場所を＜アゼルバイジャン＞とする感覚は全く存在せず、彼らは＜アゼルバイジャン＞に何ら特別な感情も抱いていなかったのである、と本章は結論づける。

それでは、＜アゼルバイジャン＞に対する地理認識が希薄な状態で、いかにして＜アゼルバイジャン人＞民族意識が形成されていったのだろうか。第3-7章では、南東コーカサスの知識人の言説に注目して、＜アゼルバイジャン人＞アイデンティティの形成過程が論じられる。

第3章「新たな帰属意識の模索——近代歴史学の祖バキューハノフと＜東コーカサス地方＞」では、ロシア経由で南東コーカサスに西洋的・近代的知識を導入したことで知られる、19世紀に活躍した知識人で、ロシア軍所属の翻訳官でもあったバキューハノフの歴史認識・地理認識や民族観が示される。テュルク語話者であった彼がペルシア語とロシア語で著した歴史書『エラムの薔薇園』には、歴史を共有する一つのまとまりとして想定されている＜東コーカサス地方＞という地理的概念が登場する。しかし、シルヴァーン地方とダゲスタン地方の一体性が強調される一方で、シルヴァーン地方とアッラーン(ガラバグ)地方との結びつきが明確ではない点で、この地理認識は曖昧なものであった。また、バキューハノフは南東コーカサスの住民を多様な民族の混血・混在と考えており、単一の集団という認識は持っていなかったという。著者によれば、彼のこのような民族観は「前近代的」なものであり、そこには「近代的」な「民族(ネーション)」の要素はほとんど見られない。

続く第4章「近代的民族意識の萌芽——国民文学の父アフンドザーデと＜イラン＞との間」では、19世紀半ばに活躍した作家、帝政ロシアの東洋語翻訳官であり、「アゼルバイジャン民族主義の祖」「イラン民族主義の祖」と評されるアフンドザーデの思想に焦点が当てられる。ヨーロッパ由来の近代的な「民族(ネーション)」や「民族主義(ナショナリズム)」(補論3「19世紀ヨーロッパにおける「民族」の理論」)を南東コーカサスに紹介・導入したアフンドザーデは、イラン、オスマン帝国、南東コーカサスの住民を包括的に意味する＜イスラーム民族＞(「イスラームのミッレット」「ムスリムのナツィヤ」という伸縮自在な言葉を好んで用いたという。この言葉には、＜トルコ＞、＜タタール＞あるいは＜カフカース＞といった多くの非＜イラン＞属性を有しながらも、それでもなお＜イラン＞の一員でありたいと熱烈に望んでいたとされる彼の複合的なアイデンティティのあり方が反映されている。

次に、第5章「変化していく『我々』の輪郭——『種蒔く人』と民族としての＜カフカースのムスリム＞」では、パキュハノフやアーフンドザーデに続く世代の知識人ゼルダービーが1875年にバクーで創刊したテュルク語新聞『種蒔く人』を主要な史料として、彼や周辺の知識人たちの帰属意識のあり方が明らかにされる。ゼルダービーらが提唱した＜カフカースのムスリム＞という言葉は、アーフンドザーデが用いた＜イスラーム民族＞という多義的で曖昧な概念とは異なり、南コーカサスに居住する他の諸民族(ロシア人、グルジア人、アルメニア人などのキリスト教徒)との対比を特徴とする、輪郭が明確な集団名であった。＜カフカースのムスリム＞は、単一の民族であるという意識が元来は希薄であった南東コーカサスの住民を一つの集団として表現した最初の言葉として、また、＜アゼルバイジャン人＞の原形として重要であるという。著者によれば、現地に住む人々が自分たちの民族集団の輪郭を明確に想像することができたのは、ロシア領カフカース地方への編入を契機として、ロシア式の教育を受けた南東コーカサスの啓蒙的な知識人によって、地理概念、あるいは地名としての＜カフカース＞が紹介・普及されたためであった。つまり、ロシア帝国による南東コーカサス征服こそが、アゼルバイジャン民族意識形成の端緒となったのである。

＜カフカースのムスリム＞であった南東コーカサスの知識人の自己認識が＜アゼルバイジャン人＞へと変容していく過程は、第6章「＜アゼルバイジャン人＞の出現——ウンスィーザーデとティフリスの論客たち」で論じられる。19世紀後半の南東コーカサスの人々は、自分たちの言語が他のテュルク諸語と異なることを認識しながらも、主に＜トルコ語＞と自称していた。1880年代半ば、当時の南コーカサスにおけるテュルク語出版の中心地であったティフリスで活躍していた、『ケシュキュル』誌の発行者であったジェラル・ウンスィーザーデをはじめとするテュルク系知識人たちは、これまで使われてきた＜カフカースのムスリム＞という民族名に疑問を抱き、宗教的な要素を民族の定義から排除することを目指した。彼らは、言語が「民族」を定義する重要な要素の一つであると考え、当時ロシアの学界を中心に広まっていた＜アゼルバイジャン語＞という言葉名(『補論4 カーゼム＝ベクと＜アゼルバイジャン語＞』)を採用するとともに、同言語の話者である自分たちは＜アゼルバイジャン人＞という民族である、という認識に目覚める。著者が指摘するように、この言語中心的な民族の定義は、言語の共通性こそが民族の決定的基準であるとする、フィヒテに代表されるドイツ的な民族観に影響を受けたものであると推察される。

このように、20世紀初頭には＜アゼルバイジャン人＞、＜アゼルバイジャン語＞といった用語がかなりの程度定着していたが、それでも多くの知識人たちの自他認識は多重的・複合的であった。＜カフカース＞あるいは＜ロシア＞を祖国とし、＜カフカースのムスリム＞という集団に帰属意識を有する者も、依然として少なくなかったようである。第7章「祖国＜アゼルバイジャン＞の形成——『モッラー・ネスレッディーン』誌に見る帰属意識の変化」は、アゼルバイジャン民族形成史において重要な役割を果たしたゴリ師範学校の著名な卒業生である、作家のメンメドグルザーデが発行した風刺雑誌『モッラー・ネスレッディーン』を主な分析対象とする。本章によれば、＜アゼルバイジャン人＞を名乗るようになった南東コーカサスの人々は、そこから逆算的に、＜アゼルバイジャン＞という名の「祖国」をイメージするようになっていった。1917年、当時絶大な人気を誇ったとされる『モッラー・ネスレッディーン』誌で＜アゼルバイジャン＞が初めて明確に「祖国」の呼称として用いられ、翌18年に建国された民族国家の名にも＜アゼルバイジャン＞が採用されると、南東コーカサスを指す地名としての＜アゼルバイジャン＞が次第に受容されていったという。だが、一方で、民族や言語の公称は依然として＜テュルク＞であり続けた。＜アゼルバイジャン＞が公式の民族名・言語名となった1936年になって初めて、祖国の名、民族の名、言語の名が一致し、＜アゼルバイジャン人＞が真の意味で誕生したと言える、と著者は結論づける。

ここまでの議論をまとめると、以下ようになる。19世紀前半まで集団としての実体をもたなかった南東コーカサスの住民は、「カフカース地方に住む、トルコ語を話す、カフカースのムスリム」(1870年代)、「カフカース地方に住む、アゼルバイジャン語を話す、カフカースのムスリム」(1880年代前半)、「カフカース地方に住む、アゼルバイジャン語を話す、アゼルバイジャン人」(1890年以降)を経て、20世紀初頭になって最終的に「アゼルバイジャンに住む、アゼルバイジャン語を話す、アゼルバイジャン人」という「我々」意識を獲得するに至った。かくして第2-7章でその創出過程が明かされた＜アゼルバイジャン＞民族意識の一つの帰結点として、終章「ニザーミーとハターイー——＜アゼルバイジャン人＞とは、誰か」では、現在のアゼルバイジャン共和国における民族主義の実態が示される。同国の「黄金時代」の象徴とされる2名の

「民族の英雄」のうち、詩人ニザーミーは地縁の要素によって、サファヴィー朝の創始者シャー・イスマーイール（ハターイー）は血縁的・文化的要素によって＜アゼルバイジャン人＞と定義されている。このように、民族国家アゼルバイジャンは、＜アゼルバイジャン民族＞という概念が成立する以前の人々や古代の王国を＜アゼルバイジャン＞へと取り込むために、地縁・文化・血統などの相反する要素をその時々に応じて都合よく用いる傾向があるという。＜アゼルバイジャン人＞の定義が今でも揺らいでいるのはそのためであろう、と著者は指摘する。そして、その背景には、「アルメニア人に自分たちの土地を奪われた」という「被害者意識」（319 頁）があるらしい。世界各国・各地域を見渡してみても、「民族」の歴史が恣意的に解釈され、政治利用されることは決して珍しい現象ではない。しかし、新生国家であり、ナゴルノ＝カラバフ問題のように深刻な領土問題を抱えているアゼルバイジャン共和国の場合、この傾向は特に顕著であると言えよう。

以上が、本書の議論の流れである。なお、巻末には、19 世紀から 20 世紀初頭における南東コーカサス関連史料の解題や翻訳が、付録 1「19 世紀の南東コーカサスで著された歴史書・地誌」、付録 2「ロシア帝政期南東コーカサスにおけるテュルク語定期刊行物」、付録 3「バキュハノフ『エラムの薔薇園』前文及び序章」、及び付録 4「新聞・雑誌記事抄録」にまとめられている。これらの付録は、当時の南東コーカサスの知識人たちによる学術・芸術活動やジャーナリズムの概要を把握する上で必要な情報を簡潔かつ的確に示している。今後この地域の研究を志す者のみならず、評者のように同時代の他地域のムスリム知識人の比較研究を進めようとする者にとっても、大いに役立つに違いない。

＜評者の感想＞

以上見てきたように、本書は、南東コーカサスのテュルク系知識人が残した芸術・学術作品をはじめとする多言語史料を読み解き、民族としての自覚が芽生え始める 19 世紀後半やそれに先行する時代、そして今日のアゼルバイジャン共和国までも分析対象とすることによって、＜アゼルバイジャン＞民族意識の形成現場を活写することに見事成功している。その結果、＜アゼルバイジャン人＞アイデンティティの創出過程に対する体系的・通時的理解が初めて可能になった。これは、20 世紀以降の分析に偏りがちな先行研究が成し遂げられなかったことであり、本書がコーカサス史研究にもたらした大きな貢献であると言えよう。加えて、＜アゼルバイジャン＞民族意識の形成において、スンナ派・シーア派という宗派の差異が重要視されていたわけではないという著者の指摘（326、327 頁）は、サファヴィー朝統治下における住民のシーア派化を民族形成の契機と見なす先行研究に再考を促すものである。その他、宗派・宗教に関連して個人的に興味深く感じたのは、本書が取り上げる知識人のなかには無神論者もいれば、伝統的なイスラーム諸学を修め宗教活動に従事した経験を持つ者もいたという点である。著者が「ムスリム知識人」ではなく「テュルク系知識人」という言葉を用いているのは、彼らの宗教信仰のあり方の多様性を反映してのことであろう。また、全体的に、多くの写真や図表が挿入されていることも、本書の特徴の一つと言える。これらの視覚資料は、日本の読者の多くにとって馴染み深いとは言えないこの地域の雰囲気を感じ取り、歴史的な流れを理解する上で極めて有用である。これらの理由から、コーカサスの歴史をめぐる研究に新たな風を吹き込んだ本書の功績は、高く評価されるべきである。

さて、以下にいくつかの論点を提示したい。ただし、評者はアゼルバイジャンやカフカースの専門家ではないため、本書についての的確な批評を行うことができるかいささか心許ない。そこで、自身が研究対象とする中国のムスリムとの比較の視点から、本書の問題点について管見を述べることにする。

第一に、本書で取り上げられている複数の定期刊行物についてのより詳細な情報が求められる。たとえば、第 5 章で取り上げられている『種蒔く人』は「農民」、すなわち＜ムスリム＞の一般大衆を読者として想定していたとある（197 頁）が、当時の南東コーカサスの人々の識字率はどれほどであったのか。同誌は現地社会でどのような人々に読まれ、どれほどの影響力を有していたのか。その他の定期刊行物に関しても、発行部数やパトロンの有無についての言及がほとんどないため、南東コーカサスにおけるテュルク語メディアの役割が不明瞭である。また、本書の主題である「民族」や「国家」に関する話題が、これらの定期刊行物の紙面上でどれほどの割合を占めていたのかも気になる。評者が研究対象とする漢語を話すムスリム（中華人民共和国における回族にはほぼ相当）が 20 世紀初頭に発行していた定期刊行物の場合、当局の検閲を恐れてか、「民族」など敏感な問題を真正面から論じる記事は意外と少ない。むしろ、衣食住などムスリムの日常

生活に関する何気ない記事のなかに、彼らの「民族」観を知る上で有用な情報を紛れ込ませるような「工夫」の跡が見える [Unno-Yamazaki 2016]。ロシア当局による検閲が厳しかったとされる「冬の時代」(234-236頁)の南東コーカサスの知識人は、このような「工夫」を必要としていなかったのだろうか。「民族」に一見関係がなさそうに思える話題を扱った記事にこそ、当時の人々の「民族」観を知る手がかりが隠されてはいないだろうか。

第二に、本書における「知識人」とは、そもそも何か。各章が取り上げる「知識人」の職業は教育者、作家、芸術家、ジャーナリスト、戯曲家など、多岐にわたる。だが、彼らのなかには、前述のとおり、帝政ロシアの東洋語翻訳官や軍官僚を歴任した者も少なくなかったし、1911年に創設されたアゼルバイジャンの民族主義政党であるミュサーヴァート党党員として政治活動に従事した者もいた(266-267頁)という。本書では、本来ロシア当局との関係が深かったこれらの人物が、あたかも「上」(為政者、支配者)の思惑に縛られることなく、知的活動を通して「下から」自発的に民族意識を形成していったかのように描かれているが、評者はこの論調に違和感を覚える。むしろ、「上」と「下」(一般民衆)を仲介しながら民族意識の創出と普及に奮闘した、いわば「民族エリート」としての彼らの役割に目を向けることによって、彼らの「民族」観をより立体的に把握することが可能になると思われる。なお、本書で取り上げられている「知識人」たちと深い関係を持ち、自身も複数の定期刊行物を主宰していたとされるミュサーヴァート党指導者のレスールザーデがあまり大きく取り上げられていないのには、何か特別な理由があるのだろうか。また、著者は、第7章において、1915-1917年の時期に「メンメドグルザーデの帰属意識が<カフカース>から<アゼルバイジャン>に変化した過程や理由に関しては、明らかではない」(281-282頁)と述べているが、これは1915年前後にミュサーヴァート党関係者たちが南東コーカサスを指して<アゼルバイジャン>と呼び始めた(280頁)ことと果たして無関係なのだろうか。

もしかしたら、著者は、南東コーカサスにおける学術の発展に寄与した人々の功績を強調するために、「民族エリート」ではなく「知識人」という言葉にこだわったのかもしれない。しかし、南東コーカサスの「知識人」の学術活動と政治活動を同時に検討することによって、彼らの「民族」観に対する理解をさらに深めることができると評者は考える。中国・中央アジアの事例を挙げると、19世紀後半から20世紀前半の時期における、東トルキスタン出身のテュルク系ムスリム(現在のウイグル人にはほぼ相当)の民族観を考察したブローフィーは、ソ連領における彼らの知的営為と政治活動の両方を論じることによって、「ウイグル・ネイション」概念形成のプロセスを鮮明に描き出している [Brophy 2016]。いずれにせよ、主な分析対象とする以上は、「知識人」という語についての明確な定義や、「知識人」と政治の関係についての詳しい説明が必要であると思われる。

第三に、南東コーカサスの知識人の民族観や歴史・地理認識の形成過程において、その背景にあったと考えられる神話・伝説的な世界観は、どのように位置づけられるだろうか。本書でも複数回引用されているミスは、前近代的なエトニの構成要素の一つとして「共通の血統神話」を挙げた。本書では、知識人の神話・伝説的な世界観については第3章で、「血統神話」と呼べるものについては現在のアゼルバイジャン共和国の事例を扱った終章で論じられているものの、他の章ではほとんど言及されていない。再び中国の事例を挙げると、漢語を話すムスリムのあいだでは、唐代に預言者ムハンマドによって中国に派遣されたアラブ人ムスリムが祖先であるという民間伝承が、数世紀にもわたって語り継がれてきた。多くの歴史学者はこの伝承を事実無根であると批判してきたが、漢人とは異なる「血統」を持つというムスリムの「我々」意識を支え、20世紀前半に彼らが単一の「民族」であることを主張する際に論拠の一つになったのは、他でもないこの起源説話であった [Unno-Yamazaki 2016]。近代東トルキスタンのテュルク系ムスリムの歴史認識を考察したサムもまた、一般大衆のあいだで信じられてきた、イスラームの聖者に関する伝説や民間伝承の重要性を指摘している [Thum 2014]。19世紀から20世紀初頭に活躍した南東コーカサスの知識人や一般大衆の「民族」観の背景にもあったと思われる神話的世界観や「血統神話」についての、著者の今後の研究成果を待ちたい。

最後に、些末なことではあるが、巻末の索引(事項/人名/地名)に掲載されている用語数が少なく、本書を読み返す際にかかなりの不便を感じた。たとえば、『種蒔く人』『ケシュキュル』などの定期刊行物名は索引に載っているのに、同じく重要な史料であるはずの『エラムの薔薇園』といった本の名前は掲載されていない。南東コーカサスの知識人の「民族」観に影響を与えたと思しきヨーロッパの哲学者の名前や、バクー、

ティフリスといった地名も見当たらない。第二版以降ではより充実した索引となっていることを期待する。

以上、若干の疑問や問題点を挙げたが、本書は全体として、精緻な史料読解の成果である豊富な事例を論拠として、＜アゼルバイジャン＞民族意識の形成過程を初めて本格的に示した画期的な著作である。「民族」や「国家」といった大きな問題に対する議論も、多くの示唆に富んでいる。旧ソ連圏やイスラーム地域を対象とする研究者だけではなく、広く「民族」に関心のある読者にとっても、本書は必読の一冊となるだろう。

＜参考文献＞

大塚和夫他編 2002 『岩波イスラーム辞典』 岩波書店。

小松久男他編 2005 『中央ユーラシアを知る事典』 平凡社。

Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Thum, Rian. 2014. *The Sacred Routes of Uyghur History*. Cambridge, MA: Harvard University Press,.

Unno-Yamazaki, Noriko. 2016. “Under Crescent and Full Moons: Contradiction and Coherence of Muslims in Beijing 1906–1913.” Unpublished doctoral dissertation, The University of Tokyo.

(海野 典子 日本学術振興会特別研究員)

Kazuyo Murata. 2017. *Beauty in Sufism: The Teachings of Rūzbihān Baqlī*. Albany: State University of New York Press, xiii+198pp.

本書は、12世紀イラン南部の都市シーラーズで活躍したスーフィー、ルーズビハーン・バクラー・シーラーズィー (Rūzbihān Baqlī Shīrāzī, d. 1128–1209) の、美に関する議論を中心に、スーフィズムにおける美の議論について論じたものである。

一見すると、スーフィズム・美・ルーズビハーン、という同書のタイトルから、いわゆるイラン的スーフィズムに典型的に見られる陶醉系スーフィーが展開した甘美な議論について取り扱った研究書であるかのような印象を受けるが、その内容は実に多岐に渡っている。同書は『スーフィズムにおける美』と銘打ってはいるものの、スーフィズムに関連して、哲学、神学などにおける美の議論の変遷なども丁寧に説明しており、筆者の広い視野と関心とを十全に反映した内容構成となっている。序章において筆者は、同書において1) なぜルーズビハーンは美についてこれほどまでに語ったのか、2) 彼の神理解、世界観、人間観において美の持つ意味とは何か、3) 神的美はどのように被造物の中の美と対比されるのか、4) 世界と人間の創造の過程において美の持つ意味とは何か、と言った具合に、12もの質問が投げかけられると述べており (p. 3)、無限に湧いてくる美に関する筆者の好奇心が同書の執筆の一番の動機であることは疑いようがない。

以下が全5章から成る同書の概要である。

第1章「美についての議論」

第2章「美をめぐる言説」

第3章「美の神学」

第4章「美の人類学と美の宇宙論」

第5章「美の預言者論」

第1章は、イスラームにおける美の議論に関して特に貢献したとされるスーフィーと哲学者の議論から美についてを検討している。分野としては哲学・スーフィズム・神学に属する3つの主要な学派の議論を検討しているが、この3者を分ける線は明確ではないとして、3者が混在する形で様々な観点から美に関する議論を収集し、紹介している。まずはクルアーン、ハディースに表れる美に関する議論を紹介し、その後順に存在論、神学、宇宙論、宇宙生成論、倫理と高潔さ、美と愛の精神、美と喜びの精神、美と悲壮の精神の